宮城県遊技業協同組合
「震災後の生活弱者等への支援及び地域の安全安心の確保に向けた支援活動」事業

宮城県遊技業協同組合
理事長
竹田隆さん

東日本大震災の激甚災害の指定を受けた被災地・宮城県で復旧・復興を側面から支える

行政支援の網の目からこぼれがちな生活弱者が安心して暮らせるために

岩手県、宮城県、福島県の東北3県を中心に、死者15,899人、行方不明者2,526人（2021年3月10日、警察庁緊急災害警備本部発表）という未曾有の被害となった2011年3月11日の東日本大震災の発生から、ちょうど10年が経過した。その間、遅々とした歩みながらも道路、住宅、港湾などのインフラ整備が進められ、徐々に復旧・復興に向けた形が整えられてきた。しかし、被災地の現地に足を運べば明らかなように、失われた生業の回復には至っておらず、さらなる経済的支援や人的支援、精神面でのケアが必要な状況にあり、復興も「途（みち）半（なか）ば」といった感は否めない。

特に問題となるのは、国や自治体などの行政支援の網の目からときとしてこぼれてしまう、いわゆる「生活弱者」と呼ばれる人々がいることである（例えば、震災孤児、難病患者、身体障がい者などの要支援者）。そうした人々が少しでも安心して暮らせるようにならなければ、本当の意味での復興とはいえないだろう。

そうした復興を側面から支えることも地元で事業を営む企業が果たすべき社会的責任の一環といえるが、東日本大震災以前からそうしたことに継続的に取り組んできたのが、宮城県遊技業協同組合（以下、宮遊協）である。宮遊協では、コロナ禍の厳しい財政状況のなか、ともすれば見過ごされがちになる生活弱者などに対する支援や、地域の安全や安心の確保につながる社会貢献活動を2020年も実施した。

児童養護施設や宮城骨髄バンク等3団体に寄付金を贈呈

毎年、防犯や社会福祉団体に寄付金を贈呈

大震災、新型コロナと続くなかで関係者と共に苦労を分かち合う

宮遊協では生活弱者などに対する支援として、2014年から児童養護施設の社会福祉法人「気仙沼旭が丘学園」に毎年100万円（2020年は50万円）の寄付を行っている。また、2016年から一般社団法人「宮城骨髄バンク」に毎年50万円（同25万円）、2014年から仙台市にある児童養護施設のNPO法人「子どもの村東北」に毎年50万円（2017年は30万円、2020年は25万円）の寄付金を贈った。宮城骨髄バンクと子どもの村東北に対する寄付金の贈呈式は2020年9月に宮城県遊技会館で行われたが、前者の坪内啓理事からは、「骨髄バンクの登録者を増やすため、大切に使いたい」、後者の飯沼一宇理事長からは、「全般的に寄付金が減るなか、支援を続けていただきありがたい」と、感謝の言葉が寄せられた。上記3団体への寄付金は従来、6月に行われる「ファン感謝デー」の収益金から充てられていたが、2020年はその催事がコロナ禍で中止されたことから、組合本体からの拠出で対応したという。宮遊協の竹田隆理事長は、「経営は厳しいが、こんなときだからこそ、社会福祉団体のみなさんと苦労を分かち合いたい」と、贈呈式で話した。

さらに1992年からヤクルトとの共催で、県内4箇所の社会福祉施設に対し、軽作業（組合員ホールの正月客に配布する年賀用品への年賀シール貼付作業）実施への謝礼金を含めた寄付金を贈っている。

また、地域の安全安心の確保につながるものとしては、2009年から公益財団法人「日本盲導犬協会仙台訓練センター」に毎年50万円の寄付、1997年から公益社団法人「宮城県防犯協会連合会」に毎年100万円、1998年から公益財団法人「宮城県暴力団追放センター」に毎年100万円、2010年から公益社団法人「みやぎ犯罪被害者支援センター」に毎年50万円の寄付を行っている。